実践報告

学校教育を通じて育むべき資質・能力の育成を目指した教育課程編成の実証的研究報告

An Empirical Research Report on Organizing Curriculum Aimed at Fostering Qualities and Abilities to Be Nurtured through School Education

笠原　陽子
Yoko Kasahara

要旨：本研究は、「学校教育を通して育むべき資質・能力を教育課程全体の構造の中で示し、それらを確実に子どもたちが身につけることができるよう、教育課程の全体像を念頭に置きながら日々の教育活動を展開する」（論点整理）ことを研究の基本に据え、「学習指導要領」の理念を実現するために必要な方策として、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために、どのように教育課程を編成し、どのように実施・評価し改善していくのかという「カリキュラム・マネジメント」の確立を目指した学校研究である。その際、研究仮説として「資質・能力が育成された生徒の姿を設定し、その実現に向けて教育活動をデザインするため、教育課程の評価･改善について計画的･組織的に取り組めば（カリキュラム・マネジメント）本校で育成したい4つの『資質・能力』を育成することができたかどうか学習評価等によって検証することができるであろう」を設定し3年間の研究に取り組んだ。

キーワード：資質・能力、カリキュラム・マネジメント、授業改善、学習評価

Abstract：This study “shows the qualities and abilities that should be nurtured through school education in the structure of the entire curriculum, and keeps the overall picture of the curriculum in mind so that children can surely acquire them. While developing daily educational activities” (arrangement of issues) is the basis of research, and as a necessary measure to realize the idea of “learning guidance guidelines”, based on the appearance of children and the actual situation of the area, etc. This is a study aimed at establishing “curriculum management” on how to organize the curriculum and how to implement, evaluate and improve it in order to realize the educational goals set by each school. At that time, as a research hypothesis, “If you plan and systematically work on the evaluation and improvement of the curriculum in order to set the figure of the student whose qualities and abilities have been cultivated and design the educational activities for its realization (curriculum).・Management) We set “It will be possible to verify by learning evaluation etc. whether or not we were able to develop the four” qualities and abilities “that we want to develop at our school” and worked on the research for three years.

Keywords：qualifications / abilities, curriculum management, class improvement, learning evaluation

玉川大学　教師教育リサーチセンター

1. 研究の目的

文部科学大臣より「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が中央教育審議会に諮問されたのが平成26年11月のことであった。その後、2年1か月に渡る審議を経て平成28年12月21日に「幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」答申が示された。その間の、平成27年には文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会　教育課程企画特別部会から「教育課程企画特別部会　論点整理」（以下「論点整理」と記載する）が出されている。

この「論点整理」p.6に「次期改訂に向けての課題」として、次のような記載がある。（一部略　引用）

○「社会に開かれた教育課程」の視点に立ち、社会の変化に向き合い適切に対応していくため、学校教育を通じて育むべき資質・能力を教育課程全体の構造の中でより明確に示し、それらを子供たちが確実に身に付けることができるよう、教育課程の全体像を念頭に置きながら日々の教育活動を展開していくことが求められている。

○ そのためにはまず、各教科等の在り方を考える際に、教育課程の要素全体が相互に有機的に関係し合って機能しているかどうかが問われなければならない。改訂を重ねるごとに各教科等の独自性が増していく状況に対して、果たして教育課程が、学校全体の教育活動のバランスや調和といった観点から、その総体的な意義や存在感をどこまで示しているか、学校教育目標の達成にどのような役割を果たしているかを検討する必要がある。（下線：筆者）

下線部に共通することは、全ての教職員が教育課程全体の構造を把握し、その中で子供たちに育むべき資質･能力を確実に身に付けることができるよう教育活動を展開することを求めていることである。「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）（以下「学習指導要領」と記載する）では、日々の授業を中核として、子どもが活躍する20年後、30年後をイメージし、学校の役割、ミッションを改めて考え直し、知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等の意義を共有しながら、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせ資質・能力の育成を目指すことを示したものと言える。

各学校においては、「論点整理」で示された内容を踏まえ、「学習指導要領」の内容がどのようなものになるか慎重に見極めながら、新たに示される事柄に対応するために情報収集･整理に努め、研修会等を通じて、来るべき時代に向けた準備を進めていた。

本実践報告は、まさに上記で示した期間から「学習指導要領」が告示され、移行措置期間を経て全面実施に至るまでの継続した校内研究に携わる中で得られた成果を基に、考察したことを報告するとともに、今後の実践に役立つ知見を提供するものである。

本実践の意義は、先の論点整理で示されていた、「学校教育を通して育むべき資質・能力を教育課程全体の構造の中で示し、それらを確実に子どもたちが身に付けることができるよう、教育課程の全体像を念頭に置きながら日々の教育活動を展開すること」を研究の基本に据えて取り組んだことにある。そして、「学習指導要領」の理念を実現するために必要な方策として、「論点整理」p.21～22で示されていた「子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかという『カリキュラム・マネジメント』の確立が求められる」とあることを、3年間の研究により明らかにしようとしたものである。

2. 研究の内容

(1) 対象校
横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校
(2) 研究体制
研究主任を中心に年度毎に体制を見直し推進
(3) 研究テーマ
「資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントと学習評価」(2018年～2021年)
(4) 校内研の進め方
・年間計画に研究日を位置づけ、継続的・計画的に実施
・研究主任とは事前・事後に十分な話し合いを行い、研究の方向性、具体的な手立て等について筆者からの提案、アドバイスを踏まえて、研究主任が中心になって進めていった。
(5) 研究方法等
・研究を進めるにあたって、研究主任と相談の上、研究仮説を立て研究に取り組むこととした。
「資質・能力が育成された生徒の姿を設定し、その実現に向けて教育活動をデザインするため、教育課程の評価・改善について計画的・組織的に取り組めば（カリキュラム・マネジメント）本校で育成したい4つの『資質・能力』を育成することができたかどうか学習評価等によって検証することができるであろう」(仮説)
・この仮説を検証するため、アンケートの実施、学習評価への取組、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、カリキュラム・マネジメントの取組を実践し、得られた結果・成果を基に考察を行う

アドバイザーとしての役割として、
・年間30回以上の研究会に継続的に参加し、日常の研究活動の状況を記録
・研究の方向性や取組についてのPDCAのサイクルを通じて課題を整理
・授業参観、研究協議での指導・助言
・研究を通じて実施したアンケート等の分析への協力・助言
・研究的視点や学問的見地からの情報を提供し、実践を意味づける取組を継続して実施

3. 研究の経過・結果

研究対象校に筆者がアドバイザーとして関わったのは2018年度からになる。筆者が関わるようになるまでの研究成果と課題を踏まえた上での取組であることから、まずは3年間の研究概要を示すこととする。ここで示す研究概要は研究対象校で作成した研究紀要（2015年度から2017年度の校内研究紀要）総論を基に、再構成したものである。

(1) 2015年から2017年までの研究経過と研究概要

2014年は、1. 研究の目的でも触れたように文部科学大臣より「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」を中央教育審議会に諮問をした年である。それに呼応する形で、2015年度に、「学習指導要領」「学校教育目標と生徒会スローガン（図1中の図1)」「目の前の生徒の現状」の3つの視点から「本校に育成したい資質・能力」について全職員で検討し、各教科において「本校で育成したい資質・能力」をキーワードに研究に取り組みはじめた。その際、研究テーマを「育成したい資質・能力を踏まえた授業づくりと評価」として3年間の研究がスタートした。2年目、3年目の取組の概要は以下の通りである。

研　究　概　要

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校　平成30年度研究主題

資質・能力を育成するための
カリキュラム･マネジメントと学習評価の充実（1年次）

1. 主題設定の理由

(1) 昨年度までの研究の成果

平成 26 年度
各教科において[本校生徒に育成したい資質･能力]をキーワードに研究に取り組む。

「学習指導要領」「学校教育目標と生徒会スローガン（図１）」「目の前の生徒の現状」の３つの視点から[本校生徒に育成したい資質・能力]が何かを全職員で検討した。

平成 27 年度
研究主題を「育成したい資質･能力をふまえた授業づくりと評価(1 年次)」として研究に取り組む。

教育目標の実現に必要な教育の内容を，4つの資質・能力（以下，[本校で育成したい資質・能力]）として整理し，各教科の授業や単元・題材づくりを通して［資質・能力］の育成を図るための授業づくりに取り組み始めた。

平成 28 年度
各教科等において[本校で育成したい資質･能力]を,新しい時代に必要な資質･能力の「三つの柱」に基づいて整理する。

各教科で育成したい資質・能力と[本校で育成したい資質・能力を整理することで,授業や単元・題材づくりを通して［資質・能力］の育成を図ることをより意識することができた。

平成 29 年度
各教科で年間指導計画を見直し、教科横断的な視点で学校教育目標の達成に必要な内容を組織的に配列すること(カリキュラム･マネジメント)を行う。

教科で作成した年間計画を,他教科と２回の共有会を持ち,教科内容の関連を確認したり,効果的な組み合わせを考えたりした。

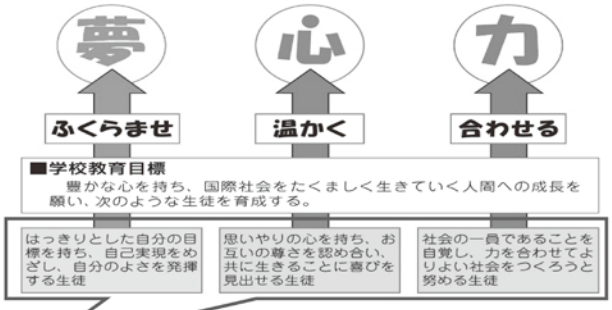


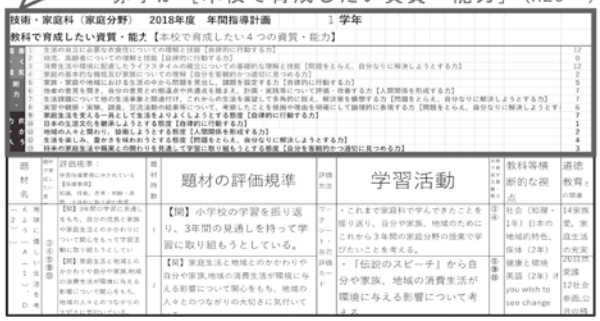
図１　本校学校教育目標と生徒会スローガン

[本校で育成したい4つの資質･能力]	本校での捉え
[自律的に行動する力]	社会や世界と主体的に関わり学びに向かう人間に育つよう，誰かに指示されなくても，自己の感情や行動を統制し，自ら考えて行動できる力。自分の生き方を考え設計する力。
[人間関係を形成する力]	対話や議論を通じて他者と効果的なコミュニケーションをとり，よりよい問題解決の方法を見いだすために，相手の考えを理解したり広げたりすることで協働して問題解決に向かう力。コミュニケーションをとる際，相手意識を持って自分の考えを他者に伝えられる力。他者の考えに傾聴し，自己の学びに結びつける力。
[問題をとらえ，自分なりに解決しようとする力]	自ら問題を発見し，どのように解決したら良いか試行錯誤し，諦めずに解決を目指す力。　考えを練り直し，何が大切かを判断することや，解決方法を探索して計画できる力。
[自分を客観的かつ適切に見つめる力]	自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげる力。つまり，現在の自分自身をモニタリングし，今後の学習計画を効果的に修正，調整できる力。

表１[本校で育成したい４つの資質・能力]
（本校の実態を踏まえて）

	生きて働く知識・技能	未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等	学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性
自律的に行動する力	・生活の自立に必要な衣食住についての理解・技能	・家族・家庭や地域における生活の中から問題を見出し、課題を設定する力	・家庭生活を支える一員として生活をよりよくしようとする態度 ・日本の生活文化を継承しようとする態度
人間関係を形成する力		・他者の意見を聞き、自分の意見との相違点や共通点を踏まえ、計画・実践等について評価・改善する力	・地域の人々と関わり、協働しようとする態度
問題をとら	・消費生活や環境に配慮したライフスタイルを確立するた	・生活課題について他の生活事象と関連付け、これからの	・生活を楽しみ、豊かさを味わおうとする態度

表２　　[本校で育成したい資質・能力]
三つの柱による整理（家庭分野の例）※別紙参照
*赤字が［本校で育成したい資質・能力］（H28～）


技術・家庭科（家庭分野）　2018年度　年間指導計画　1学年
教科で育成したい資質・能力【本校で育成したい４つの資質・能力】

題材名	題材の評価規準	評価方法	学習活動	教科等横断的な視点	道徳教育との関連
1	【関】小学校の学習を振り返り、3年間の見通しを持って学習に取り組もうとしている。	ワークシート、自己評価カード	・これまで家庭科で学んできたことを振り返り、自分や家族、地域のためにこれから3年間の家庭分野の授業で学びたいことを考える。	③④ 社会（知識・1年）日本の地域的特色、保体（2年）健康と環境	14家族愛，家庭生活の充実
2	【関】家庭生活と地域とのかかわりや自分や家族、地域の消費生活が環境に与える影響について関心をもち、地域の人々とのつながりの大切さに気付いて		・「伝説のスピーチ」から自分や家族、地域の消費生活が環境に与える影響について考える。	⑤⑥⑦⑧ 英語（2年）if you wish to see change	20自然愛護 12社会参画,公共の精

図１　横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校　2015年～2018年までの研究概要
（作成：附属鎌倉中学校　研究主任　海野功子主幹教諭作成を引用）

＊「三つの柱」とは，新学習指導要領第1章総則第1の3の(1)から(3)までに示す「教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力」である。

2016年度：各教科等において「本校で育成したい資質・能力」を新しい時代に必要な資質・能力の「三つの柱」に基づいて整理を行う。
2017年度：各教科で年間指導計画を見直し、教科横断的な視点で学校教育目標の達成に必要な内容を組織的に配列する。

3年間の研究の成果については、校内研究の概要（研究主任作成、研究会にて提示されたもの）に次のように示されている。

①「本校で育成したい資質・能力」を４つに定めることで、学校教育目標の実現に向かって、生徒・教師・保護者等の学校関係者全てが目指す姿を共有することができた。
②「本校で育成したい資質・能力」を中央教育審議会で示された資質・能力の「三つの柱」に沿って整理したことにより、教育課程の中で計画的・体系的に育みやすくなった。
③「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）が明確なことにより、「何が身に付いたか」を組織的・計画的に見取りやすくなった。

一方で、今後の課題については、次のように整理をしている。

今後の課題
①教科横断的な視点で学校教育目標の達成に必要な内容を組織的に配列したことの効果の検証が必要。
②「本校で育成したい資質・能力」を確実に育成するため、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業の工夫・改善に引き続き取り組む。
③「本校で育成したい資質・能力」が育成されているのかをアンケート調査などを活用して検証し、教育課程の評価・改善を行う必要がある。

2015年度から2017年度までの研究は、どちらかというと教科に軸足を置いたものであった。2018年度からの研究に関しては、各教科の授業を核として、教科横断的に資質・能力を育成するためカリキュラム・マネジメントに取り組むこととし、研究テーマ「資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントと学習評価の充実」が決定した。

ここで「学習評価の充実」を研究テーマとして位置づけたことに関しては、「論点整理」で示されていた学習評価の在り方についての以下の記載を踏まえ、指導と評価の一体化を図る観点から設定したものである。

「学習評価については、子供の学びの評価に留まらず、「カリキュラム・マネジメント」の中で、学習・指導方法や教育課程の評価と結び付け、子供たちの学びに関わる学習評価の改善を、教育課程や学習・指導方法の改善に発展・展開させ、授業改善及び組織運営の改善に向けた学校教育全体のサイクルに位置付けていくことが必要である」（論点整理p.19　抜粋・引用）

こうして3年間に渡る研究がスタートした。

(2) 2018年度の研究経過と研究概要

研究テーマ「資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントと学習評価の充実」を実践していくために、研究仮説に基づき、年度毎に研究の重点を設け、計画的に実践に取り組むこととした。

研究仮説

「資質・能力が育成された生徒の姿を設定し、その実現に向けて教育活動をデザインするため、教育課程の評価・改善について計画的・組織的に取り組めば（カリキュラム・マネジメント）本校で育成したい4つの「資質･能力」を育成することができたかどうか学習評価等によって検証することができるであろう」

1年目の研究の重点は、以下の3点とした。

①教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに取り組む。
②資質・能力の育成を図るため「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践に取り組む。
③教育内容の質の向上に向けて、教育課程の改善を図る一連のPDCAサイクルを機能させる。

特に、資質・能力の育成を図るための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業や教育課程の改善に取り組むため、職員を2つのグループ「教科ブロック」と「教科横断ブロック」（任意に研究推進部で割り振った）に分けて検討を行うこととした。その理由としては、教科の視点からの検討に加え、教科を超えて、複数の教科の職員からなる集団（教科横断ブロック）による話し合いを行うことで、多面的な視点からの検討が可能となり、協議の質が高まるであろうということからであった。

①の「カリキュラム・マネジメント」の取組に関しては、本校で育成したい資質・能力が育成されたときの姿を改めて確認し、現在の生徒の課題は何か、行わなければならない指導や手立ては何かを検討し、教育課程全体を見直し、改善すべきことを「教科横断ブロック」で検討を行った。さらに、具体的な方策について半期ごとに検討する等、教育活動全体を意識した取組を行った。

②の授業改善の取組に関しては、相互に授業を見合い、授業の質の向上・授業改善を行うための一つの工夫として従来から取り組んでいる「授業研week（授業研究週間）」の場を活用し、その際、本校で育成したい資質･能力を育むための「主体的･対話的で深い学び」の視点からの授業改善の検討会を「教科横断ブロック」で実施した。ここでは、全員が「単元・題材シート」（表1）を作成し、誰がどの授業を見ても本時に育成を図りたい資質・能力と指導内容が明確になるようにした。

③の教育課程の改善を図る一連のPDCAサイクルを機能させる取組としては、生徒アンケート（表2）を実施した。この生徒アンケートには、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙から抜粋した質問項目と、本校の生徒に育成したい「資質・能力」の変容が見取れるような二種類の質問項目を設定し、年2回実施し、経年変化を分析した。併せて、各教科でもアンケートを実施し、相互の結果を比較した。

分析の結果については、「教科ブロック」「学年ブロック」で検証を行い、改善方法について具体策を考え取り組むこととした。さらに、アンケートを基に客観的に研究についての評価を行うことで、次年度の教育課程の編成も視野に入れ、指導の改善について検討を行った。

表1 「単元・題材シート」家庭科：海野功子主幹教諭作成・提供

技術・家庭科（家庭分野）題材シート

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校　主幹教諭　海野　功子

クラス・日時
1年1組・2018年6月12日（火）1時間目
1年2組・2018年6月7日（木）4時間目
1年3組・2018年6月12日（木）3時間目
1年4組・2018年6月12日（木）4時間目

1．育成したい資質・能力

①生活の自立に必要な衣についての理解と技能
③消費生活や環境に配慮したライフスタイルの確立についての基礎的な理解と技能
⑤家族・家庭や地域における生活の中から問題を見出し、課題を設定する力
⑦生活課題について他の生活事象と関連付け、これからの生活を展望して多角的に捉え、解決策を構想する力
⑧実習や観察・実験、調査、交流活動の結果等について、考察したことを根拠や理由を明確にして論理的に表現する力
⑫生活を楽しみ、豊かさを味わおうとする態度

2．評価規準

知識	技能	工夫・創造	態度
衣服の着用、選択、手入れについて理解し、基礎的・基本的な知識を身に付けている。	衣服の着用、選択、手入れについて理解し、基礎的・基本的な技能を身に付けている。	衣服の着用、選択について課題を見付け、その解決を目指して工夫している。	衣服の着用、選択、手入れについて関心をもって学習活動に取り組み、衣生活をよりよくしようとしている。

3．取り上げる題材・教材

自分は何ができるかな？制服の一生をよりよいものにしていこう［C衣生活と自立(3)］

4．学習指導における具体的な評価規準

	【観】	具体の評価規準（評価方法）	資・能	学習活動
1 2	【知】	衣服の計画的な活用の必要性を理解し、既製服の表示と選択に当たっての留意事項や洗濯の要点と方法について理解している。（定期テスト）	① ③	・「制服の一生を考える」ことを通して、衣服の計画的な活用や既製服の選択と購入、衣服の手入れを学ぶ。
3 （本時）	【知】 【工】	【知】衣服の社会生活上の機能について理解している。 【工】目的に応じた衣服の適切な選択について考え、工夫している。（ワークシート）	⑤ ⑦ ⑧	・「銀座の公立小、新標準服アルマーニ」の新聞記事から、その問題点を考える。
4 ～ 7	【知】 【技】	【知】補修の目的と布地に適した方法について理解している。 【技】補修の目的と布地に適した方法で補修ができる。（作品・定期テスト）	① ③ ⑧ ⑫	・「制服の補修ができるようになる」ことを目標に、補修の目的と布地に適した方法で補修ができるようになる。
8	【関】	【関】衣服の着用、選択、手入れについて関心をもって学習活動に取り組み、衣生活をよりよくしようとしている。（自己評価カード）	⑧ ⑫	・よりよい衣生活を目指して、環境に配慮した衣生活に関する知識を身に付け、実践しようとする。

一時間毎の指導内容と育成したい資質能力

	生きて働く知識・技能	未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等	学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性
自律的に行動する力	①生活の自立に必要な衣食住についての理解と技能 ②幼児，高齢者についての理解と技能	⑤家族・家庭や地域における生活の中から問題を見出し，課題を設定する力	⑨家庭生活を支える一員として生活をよりよくしようとする態度 ⑩日本の生活文化を継承しようとする態度
人間関係を形成する力		⑥他者の意見を聞き，自分の意見との相違点や共通点を踏まえ，計画・実践等について評価・改善する力	⑪地域の人々と関わり，協働しようとする態度
問題をとらえ、自分なりに解決しようとする力	③消費生活や環境に配慮したライフスタイルの確立についての基礎的な理解と技能	⑦生活課題について他の生活事象と関連付け，これからの生活を展望して多角的に捉え，解決策を構想する力 ⑧実習や観察・実験，調査，交流活動の結果等について，考察したことを根拠や理由を明確にして論理的に表現する力	⑫生活を楽しみ，豊かさを味わおうとする態度
自分を客観的かつ適切に見つめる力	④家庭の基本的な機能及び家族についての理解		⑬将来の家庭生活や職業との関わりを見通して学習に取り組もうとする態度

（表1の下半分の表は学校として育成したい資質・能力を縦軸に、横軸には教科が目指す育成したい資質・能力を位置付けたマトリックスを全ての教科で作成し、授業の中での育成を図った）

表2　2018年度生徒アンケート集計結果　一部抜粋

	旧番号			2016年度									
				2016-1学期（2・3年）					2016-3学期（2・3年）				
				←思う		思わない→		平均	←思う		思わない→		平均
				4	3	2	1		4	3	2	1	
研究	4	友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ【人】	友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ	72	123	97	35	2.71	147	146	28	4	3.34
	14	地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある【自】	地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある	112	143	61	11	3.09	96	148	73	7	3.03
	15	地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがある【自】	地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがある	96	138	73	20	2.95	81	145	83	15	2.90
	21	授業のはじめに、目標（めあて、ねらい）が示されていたと思う【メ】	授業のはじめに、目標（めあて、ねらい）が示されていたと思う	230	84	12	2	3.65	171	135	19	1	3.46
	22	活動の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思う【メ】	活動の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思う	110	161	48	8	3.14	108	150	57	11	3.09
	23	授業で扱うノートやワークシートには、学習の目標（めあて、ねらい）とまとめを書いていたと思う【メ】	授業で扱うノートやワークシートには、学習の目標（めあて、ねらい）とまとめを書いていたと思う	180	115	26	5	3.44	144	146	34	2	3.33
	25	学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う【問】	学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う	49	96	117	64	2.40	51	108	117	50	2.49
	26	生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考を深めたり、広げたりすることができていると思う【人】	生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う	139	143	29	11	3.27	115	177	32	2	3.24
	27	#N/A	授業では、先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思う。	115	169	33	5	3.22	77	207	38	4	3.10
	28	#N/A	授業で、生徒の間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかり伝えていたと思う	102	178	41	6	3.15	93	182	46	4	3.12
	29	#N/A	授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う	75	172	69	9	2.96	52	178	89	7	2.84
	30	#N/A	各教科等の授業を通じて、問題に対して試行錯誤しながら解決しようとすることができていると思う	120	157	43	7	3.19	82	170	69	4	3.02
	31	#N/A	各教科等の授業を通じて、自分が考えたことや学んだことを振り返り、新たな学習に生かそうとすることができていると思う	107	158	54	8	3.11	72	179	69	4	2.98

(3) 2019年度の研究経過と研究概要

研究テーマ「資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントと学習評価の充実」の2年目の研究の重点は、以下の3点とした。

①資質・能力の育成を図るため「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取り組みを活性化
②目の前の生徒の現状を踏まえ、「資質・能力」の育成を図ることができたかを検証し、今後、どのような資質・能力を図るのかを検討しながら、更なる教育活動の充実を目指す。
③指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かす学習評価の充実を目指すため、生徒の良い点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感させることができる評価のあり方を検討する。

2年目の研究に取り組むにあたり、研究組織の中に新たに「資質・能力チーム」と「学習評価チーム」を位置づけ、より一層、教員一人ひとりが主体的に研究に取り組む（自分事として）ことを狙った。

「資質・能力チーム」は、「本校で育成したい資質・能力」の見直しに取り組み、「学習評価チーム」は「学習指導要領」の下での「学習評価」の在り方について、今後どのようにして、指導と評価の一体化に取り組むかについての検討を行った。

それぞれのチームについて、もう少し詳しくその取組を紹介する。

まず、「資質・能力チーム」の取組は、

①「資質・能力」の育成を図るために取り組んだことで生徒にどのような力が身に付いたかについての検討を行った。
②2014年度に設定した4つの資質・能力の見直しに着手した。学習指導要領が育成を目指す3つの資質・能力に照らし合わせて、本校としてどのような資質・能力の育成を図るのか、その際、「資質・能力」が育成されたことをどのように見取るかの方法についての検討も併せて行った。

次に、「学習評価チーム」の取組は、

①「中教審・教育課程部会（報告）」を改めて読み返し、「学習指導要領」が求める学習評価の在り方についてチーム内で確認を行った。
②各教科が日ごろどのように「学習評価」を生徒の学びに還元しているかについて「チーム発表会」形式で、相互に取組を発表し、それぞれの取組について参考になった点、さらなる工夫が必要な点などをフィードバックした。

写真1　学習評価チームの検討

写真2　資質・能力チームの検討

(4) 2020年度の研究経過と研究概要

2020年度は「資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントと学習評価の充実」3年目であり、本テーマでの研究の最終年度でもあった。

研究の重点は、以下の3点とした。

①資質・能力の育成を図るため、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取り組みの充実を図る。
②目の前の生徒達の現状を踏まえ、「資質・能力」の育成を図ることができたかを検証し、2021年度より今後どのような資質・能力の育成を図るのかを検討しながら、更なる教育活動の充実を目指す。
③指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かす学習評価の充実を目指すため、生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感させることができる評価のあり方を検討する。

研究組織としては、前年度と同様「教科ブロック」「教科横断ブロック」を基本として取り組むこととした。併せて「学習評価チーム」「資質・能力チーム」での検討を継続した。前年度から、特に「学習評価チーム」での取組として「学びのプラン」の検討が行われ、学校として取り組むことが了承されたことを受けて各教科の特性に応じた「学びのプラン」の作成がスタートした。

① 「学びのプラン」について

学習指導要領の下での学習評価のあり方を研究し、今後どのように「学習指導」と「学習評価」を行っていくか検討することとし、学習評価についてこれまで取り組んできたことについて整理を行った。取組を整理したことにより、各教科等で目標と評価のつながりを生徒と教員のそれぞれが明確に持って学習活動に取り組むための工夫を行ってきたことがわかった。しかし、資質・能力を育成するためには、これまで以上に評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図る学習評価が求められることから、各教科の取組のよさを生かしつつも、教科等横断的な視点で改善を図る必要があることが明らかになった。

そこで、研究を進めるにあたり、改めて、以下の2つの視点から学習評価の取組について整理した。

ア目指す学習評価の充実
- 教師が指導の改善を図り、生徒の学習の意欲が向上することで資質・能力の育成を図ることができる学習評価が（全教科を通じて）行われること。
- 教師の指導の改善や生徒の学習意欲の向上を図るための手立てを研究すること。
- 資質・能力の育成を図るため、生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感させることができる学習評価を研究すること。

イこれまでの取組の成果
- 生徒にとって、目標が示され、見通しを持つことができることで、学びへの意欲を持って授業に取り組むことができている。
- 教師にとって、学びを支援するための指導と評価の工夫を各教科で行い、その取組を研究会で共有することで、よりよい指導や評価方法を学び合う環境が整っている。

上記の整理を行ったことで、学習評価に対する取組については、多くの場面で教科等・学年に委ねられている現状があることが明らかになった。併せて、次のような課題も明らかになった。
- 生徒にとっては、教科や教師によって評価の方針や評価方法が異なることで、その教科の方針や方法に合わせた学習の工夫を行わなければならないこともあること。
- 教師にとっては、教科や教師による評価方針や評価方法の違いによって、信頼性や妥当性の高い評価になっていると言えないところがあること。

これらの課題から、これまでの取組を生かしつつも、生徒と教師にとって、より良い評価の在り方を検討

する必要性を強く認識した。より信頼性や妥当性の高い評価にするためには何に留意するべきか、またすべての教科で共通して行うべきことは何かをまずチームで検討して取り組み、その後、全職員で共有することで、評価の在り方を確立することとした。

その際、次の点について確認した。

●生徒の具体的な学習改善につながるよう、単元の導入や展開の段階に評価場面を設定する（形成的評価に注力する）。

● 学習活動として生徒間における相互評価を授業内やプリントに設け、生徒が自身のよい点や可能性について気付くことを通じ、主体的に学ぶ意欲を高めること等、学習の在り方を改善していくことに役立つことにつながったかを検討する。

●「努力を要する」状況と見取ることのできる生徒に対して、「おおむね満足できる」状況が実現するための、教師の具体的な手立て（学習改善を促すようなコメント等）を行う。

●学習評価の方針等を事前に共有することで、生徒に学習の見通しをもたせ自己の学習調整を図らせるとともに、どのような方針によって評価したのか改めて共有する。

●「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な評価方法について、各教科等の特質に応じた多様な方法を工夫し検討する。

こうした検討を経て、「学習評価チーム」内での試行的な取組を経て「学びのプラン」として全教科で取り組むこととなった。ただし、教科の特性を考慮して形式や名称は各教科に任せることとした。（図2）

学びのプラン （日本は近世後半・欧州は近代前半）

【概要】

「日本は近世後半」は前回の学びのプラン参照してください。

この時期の我が国は，欧米諸国のアジアへの進出など複雑な国際情勢の中で開国し，急速な近代化を進めて近代国家の仕組みを整え，その後常にアジア諸国や欧米諸国と密接な関わりをもってきた。

評価について	社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
観点別評価規準（歴史的分野）	近代の歴史的事象に対する関心を高め，意欲的に追究し，近代の文化遺産を尊重しようとしている。	近代の歴史的事象から課題を見いだし，近代の特色などを多面的・多角的に考察し，公正に判断して，その過程や結果を適切に表現している。	年表や歴史地図，映像など近代に関する様々な資料を収集し，有用な情報を適切に選択して，読み取ったり図表などにまとめたりしている。	近代の特色などを，世界の歴史を背景に理解し，その知識を身に付けている。
これを頑張ろう	・学習内容に即した取り組み（ワークシート，学びのプラン振り返り） ・定期試験　・条文暗唱	・ワークシート ・パフォーマンス課題 ・定期試験	・ワークシートや作図 ・授業での中テスト ・定期試験	・ワークシート ・授業での中テスト ・定期試験　・条文暗唱
十分満足できる（A）	近代の具体的な出来事や遺跡，文化遺産を関心が高く，追究している姿が顕著に見られる。	多面的・多角的に広く考察し，公正に判断して，根拠を持って適切に表現している。	資料を収集し，有用な情報を適切に選択して，読み取って他の人にもわかりやすくまとめることができる。	近代の特色などを世界の歴史を背景に理解し，その知識を身につけた上で，既習の現代の日本と関連づけている。
おおむね満足できる（B）	近代の具体的な出来事や遺跡，文化遺産を関心持ち，追究している。	多面的・多角的に考察し，公正に判断して，適切に表現している。	資料を収集し，有用な情報を適切に選択して，読み取って図表などにまとめている。	近代の特色などを世界の歴史を背景に理解し，その知識を身につけている。
努力を要する（C）	近代とはどんな時代だったのか，どんなことがあったのかを追究しよう。	多面的・多角的に考察し，判断して，表現するようにしよう。	近代に関する資料を収集し，有用な情報を適切に選択し，読み取ろう。	近代の特色などを理解し，その知識を身につけよう。

【学習指導要領（平成29年改訂）の内容】

ア　身に付けるべき知識

(ア)　欧米における近代社会の成立とアジア諸国の動き
欧米諸国における産業革命や市民革命，アジア諸国の動きなどを基に，欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことを理解すること。

(イ)　明治維新と近代国家の形成
開国とその影響，富国強兵・殖産興業政策，文明開化の風潮などを基に，明治維新によって近代国家の基礎が整えられて，人々の生活が大きく変化したことを理解すること。

(ウ)　議会政治の始まりと国際社会との関わり
自由民権運動，大日本帝国憲法の制定，日清・日露戦争，条約改正などを基に，立憲制の国家が成立して議会政治が始まるとともに，我が国の国際的な地位が向上したことを理解すること。

(エ)　近代産業の発展と近代文化の形成
我が国の産業革命，この時期の国民生活の変化，学問・教育・科学・芸術の発展などを基に，我が国で近代産業が発展し，近代文化が形成されたことを理解すること。

(オ)　第一次世界大戦前後の国際情勢と大衆の出現
第一次世界大戦の背景とその影響，民族運動の高まりと国際協調の動き，我が国の国民の政治的自覚の高まりと文化の大衆化などを基に，第一次世界大戦前後の国際情勢及び我が国の動きと，大戦後に国際平和への努力がなされたことを理解すること。

(カ)　第二次世界大戦と人類への惨禍
経済の世界的な混乱と社会問題の発生，昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国政治・外交の動き，中国などアジア諸国との関係，欧米諸国の動き，戦時下の国民の生活などを基に，軍部の台頭から戦争までの経過と，大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解すること。

イ　身に付けるべき思考力・判断力・表現力等

(ア)　工業化の進展と政治や社会の変化，明治政府の諸改革の目的，議会政治や外交の展開，近代化がもたらした文化への影響，経済の変化の政治への影響，戦争に向かう時期の社会や生活の変化，世界の動きと我が国との関連などに着目して，事象を相互に関連付けるなどして，アの(ア)から(カ)までについて近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し，表現すること。

(イ)　近代の日本と世界を大観して，時代の特色を多面的・多角的に考察し，表現すること。

【単元を貫く問い（MQ）と評価計画】

社会の変化に政治や人々はどのように対応したのだろうか

近世・近代MQ：社会の変化に政治や人々はどのように対応したのだろうか（「次」は変更あり）											総括的評価
観点＼次	単元の導入	第二・三次	第四・五次	第六・七次	第八・九次	第十・十一次	第十一・十二次	第十三次		まとめ	
関心・意欲・態度	● 学習依頼					●		○ 学習のまとめ			A~C
思考・判断・表現			●		パフォーマンス課題		●				A~C
技能		●		●				○ 確認テスト		●	A~C
知識・理解		●	●	●	●	○ 中テ7	○ 中テ8			●	A~C

「●」…学習改善につなげる評価　「○」…評定に用いる評価

【育成したい資質・能力】

自律的に行動する力　国民主権を担う公民としての基礎的教養

問題をとらえ，自分なりに解決しようとする力　社会的事象について調べまとめる技能（調査や諸資料から，社会的事象に関する様々な情報を効果的に収集する・読み取る・まとめる技能）

自分を客観的かつ適切に見つめる力　社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を現代の社会生活と関連付けて多面的・多角的に考察

【日本は近世後半・欧州は近代前半の学びの見通し】

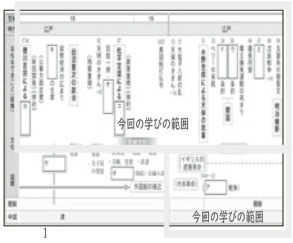


図2　第2学年　社会科歴史「学びのプラン」附属鎌倉中学校　野村友昭教諭作成・提供

4. 3年間の研究の考察

図3に示すように、3年間の継続研究ではあったが、2019、2020とコロナ感染症拡大により全国一斉の学校休業、その後の分散登校、教育活動の制限が続く中での研究となった。1年ごとに成果と課題を整理、重点化を図りながら研究を進めてきた。

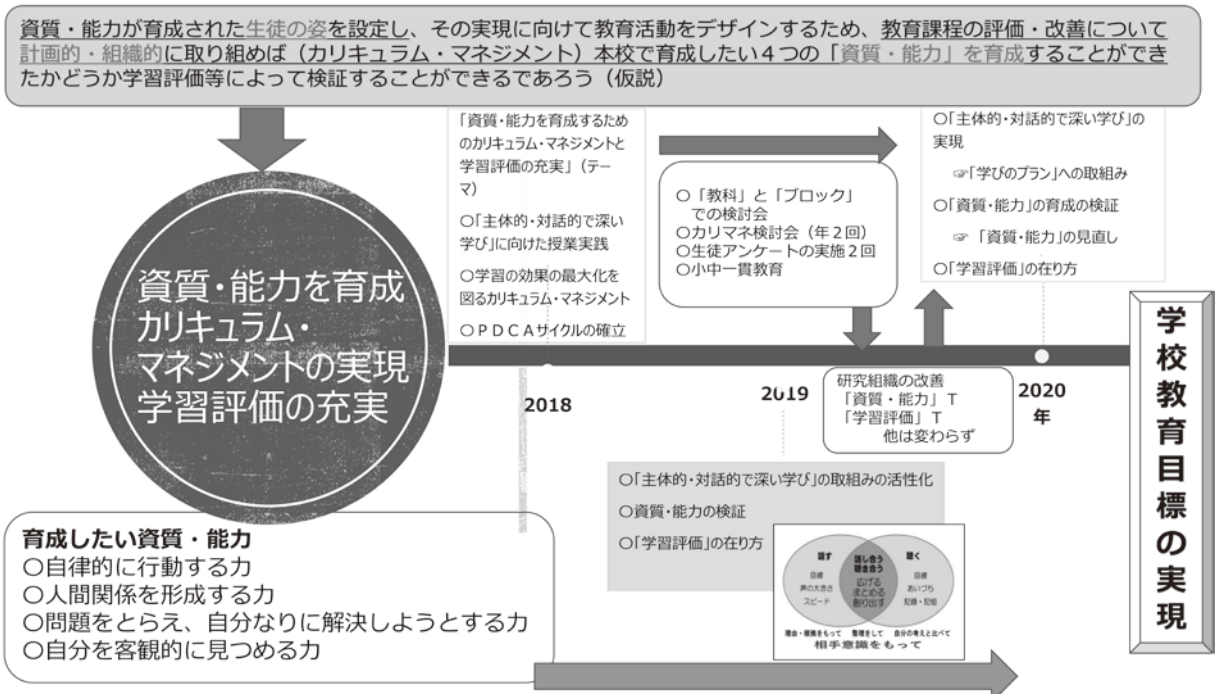


図3　附属鎌倉中学校の研究の歩み（笠原　2020）

取り組んだ内容はまさに「学習指導要領」で示されたものであり、従って、先行研究というものがあるわけではなく、手探りの状況からのスタートであった。特に、育成したい資質・能力に関しては、授業の中で育成された資質・能力を、生徒が実際にどのように他の教科や日常的な活動の中に生かしているのか、それらの見取りの方法として具体的に効果があるのはどのような方法なのか等、研究協議の中で多くの時間を費やして話し合いを行った。

先にも述べたが、本実践の意義は、論点整理で示されていた、「学校教育を通して育むべき資質・能力を教育課程全体の構造の中で示し、それらを確実に子どもたちが身に付けることができるよう、教育課程の全体像を念頭に置きながら日々の教育活動を展開すること」を、研究の基本に据えて取り組んだことにある。そして、「子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために、どのように教育課程を編成し、どのように実施・評価改善していくのかという『カリキュラム・マネジメント』の確立が求められる」ことについて、3年を費やして、その成果と課題を導き出したものである。

研究仮説として設定した「資質・能力が育成された生徒の姿を設定し、その実現に向けて教育活動をデザインするため、教育課程の評価・改善について計画的・組織的に取り組めば（カリキュラム・マネジメント）本校で育成したい4つの『資質・能力』を育成することができたかどうか学習評価等によって検証することができるであろう」について、以下、3つの観点から、アンケート結果、具体的な事例等を基にその成果に関する考察を行うこととする。

(1)「資質・能力」の育成を図ることができたかを検証する方法について

①アンケートの取組について

②学習評価の取組について
(2)「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善について
(3) 資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの取組について

(1)「資質・能力」の育成を図ることができたかを検証する方法について
①アンケートの取組について

附属鎌倉中学校が育成を目指す資質・能力は、
・自律的に行動する力
・人間関係を形成する力
・問題をとらえ、自分なりに解決しようとする力
・自分を客観的に見つめる力
の4つである。議論するにあたって、4つの資質・能力が育成された時の生徒の姿を教師一人ひとりがどのように描いているかについて、具体的な姿を尋ねると意外に明確な答えが戻ってこなかった。そこで、具体的な生徒を思い浮かべ、その生徒に、例えば「自律的に行動する力」が育ったとしたら、どのような姿になるかをお互いに発表し合い、その姿を共有することからスタートした。こうした取り組みを繰り返し行うことで、抽象的なイメージから具体の生徒の姿としてイメージすることができるようになったことで、話し合いも具体的なものとなっていった。

附属鎌倉中学校では、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙等を参考にして作成した「全校生徒共通アンケート」（表2で示したもの）を年2回実施していた。また、各教科でも年に1～2回の「教科アンケート」を実施し分析を行っていた。この「全校生徒共通アンケート」の質問項目の中に、育成したい4つの資質・能力に関連する項目を位置付けて実施している。

研究主任であり第3学年の学年主任でもある海野教諭により、担当する第3学年が、この研究がスタートした時に1年生であり、3年間の成長を見取る対象として一番適していることから、育成したい資質・能力に関して、3年間のアンケート結果を生徒に示し、自らの成長の結果について生徒から意見を求めた。（図4-1、図4-2）

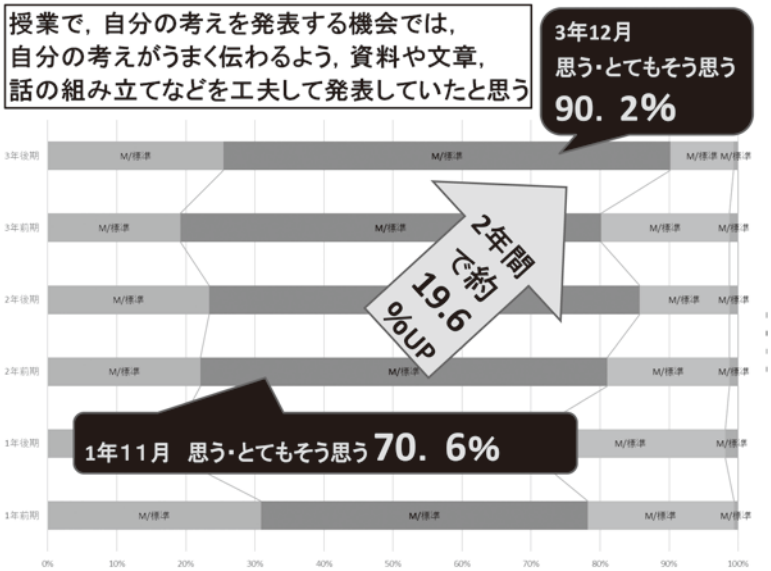


図4-1 「全校生徒共通アンケート」（2020年12月）海野功子主幹教諭による作成：引用

生徒への質問は、図4-1から図4-2とも共通して、

「なぜ、この項目が上がったと思いますか。何をきかっけとして達成率が上がったと思いますか。
この3年間の自分の経験等を含めてくわしく教えてください」というものである。
「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う。」

生徒の意見

・友達と過ごしたり授業を受けたりする中で、お互いの良いところやあと一歩のところを伝えあうことができていたからだと思う。また、3年間のアワード活動を続ける中で、人の良いところを見つけることが上達した。多くの人がアワード用紙を見て「自分には良いところもあるんだ」ということに気づいたことも理由としてあると思う。

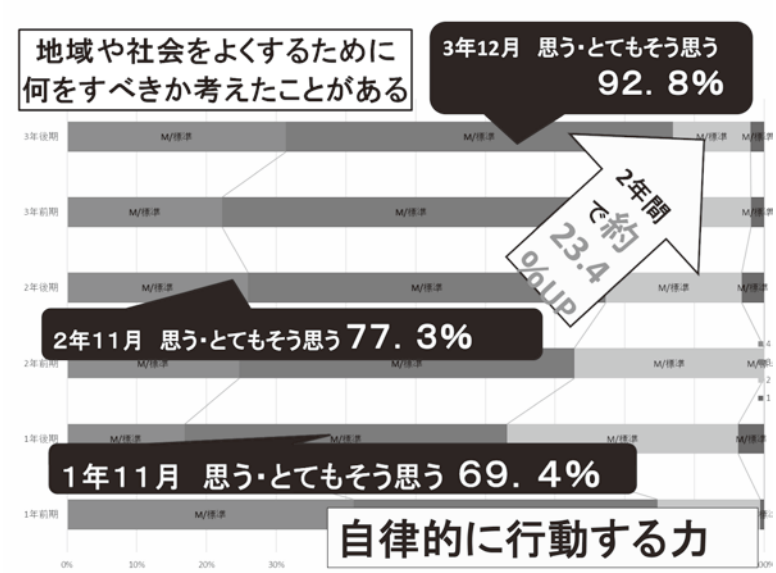


図4-2 「全校生徒共通アンケート」（2020年12月）海野功子主幹教諭作成　引用
「地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがある」

生徒の意見

・社会の授業で国連の動画を見たり、SDGsについて調べ物をしたりする際に、自分には何ができるか、自分はどんなことをすべきかということがわかったから。
・SDGsに関することが社会科や英語、理科、家庭科、技術などの授業で取り上げられることが多く、社会の現状について知る機会が多かった。

さらに、授業（技術・家庭科の家庭分野）を通して、学校として育成したい4つの資質・能力がどの程度身に付いたのかについて、生徒アンケートを実施し、生徒自身の自己評価の結果をまとめた。それが図5-1から図5-4である。図の左側の円グラフは2019年度12月（2年次158名）に実施したものであり、右側は2020年度11月（3年次155名）に実施したものである。

図5-1は、【自律的に行動する力】、図5-2は【人間関係を形成する力】、図5-3は【問題を捉え、自分なりに解決しようとする力】図5-4【自分を客観的かつ適切にみつめる力】について生徒の変化を捉えたものである。

①家庭分野の授業を通じて、指示されなくても自分で考え行動したり学習したりすることができるようになっていると思う。【自律的に行動する子】

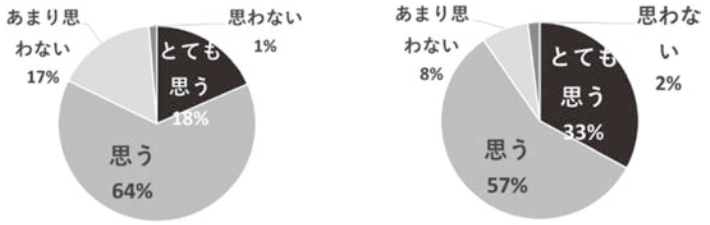


図5-1　家庭科の授業を通じて育成したい資質・能力についての生徒の自己評価結果
（海野功子主幹教諭作成・引用）

②家庭分野の授業を通じて、相手のことを考えながら自分の考えを伝える力がついてきていると思う。【人間関係を形成する力】

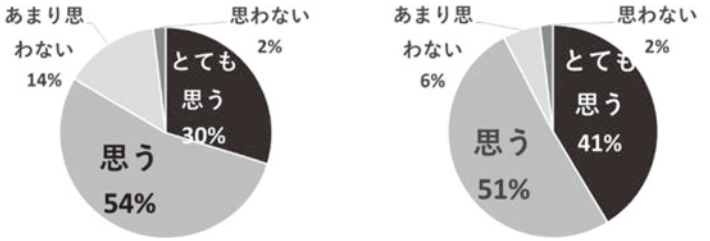


図5-2　家庭科の授業を通じて育成したい資質・能力についての生徒の自己評価結果
（海野功子主幹教諭作成・引用）

③家庭分野の授業を通じて、問題に対して試行錯誤しながら解決しようとすることができていると思う。【問題を捉え、自分なりに解決しようとする力】

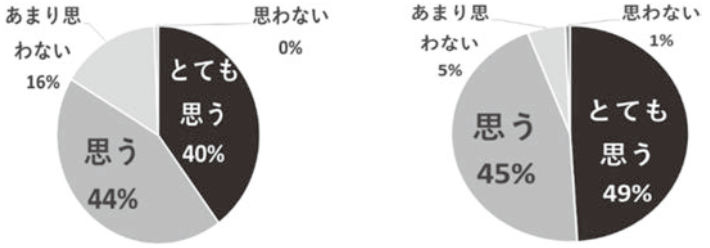


図5-3　家庭科の授業を通じて育成したい資質・能力についての生徒の自己評価結果
（海野功子主幹教諭作成・引用）

④家庭分野の授業を通じて、自分の考えたことや学んだことを振り返り、新たな学習に生かそうとすることができていると思う。【自分を客観的かつ適切に見つめる力】

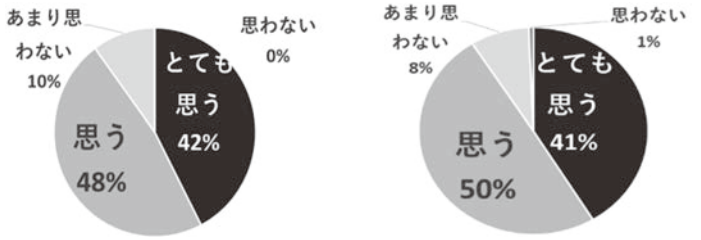


図5-4　家庭科の授業を通じて育成したい資質・能力についての生徒の自己評価結果
（海野功子主幹教諭作成・引用）

次に、上記で示した2つのアンケート分析の結果である、図4と図5のうちの一部であるが、図4–1と図5–2を用いて生徒の意識がどのように変化したかを比較してみた。

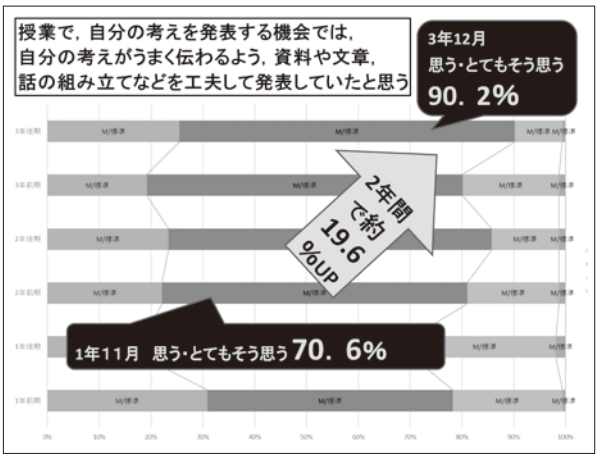


図4–1　再掲

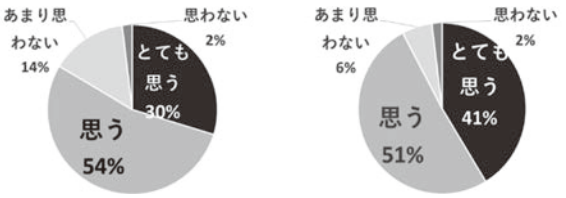


図5–2　再掲

図4–1では、「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う」、図5–2では「家庭分野の学習を通じて、相手のことを考えながら自分の考えを伝える力がついてきていると思う」という質問項目である。それぞれのアンケートが見取ろうとしている資質・能力は共に「人間関係を形成する力」である。

家庭分野の授業においては、「相手のことを考えながら自分の考えを伝える」ために生徒が行っている学習活動は図4–1のアンケート項目にある「考えを伝えるために資料や文章、話の組み立てなどを工夫」した活動である。こうした活動の実践の背景には、表1で示した「単元･題材シート」の作成･活用が挙げられる。学校として育成したい資質・能力を年間の指導計画に位置付け、教科の学習を通して計画的・意図的に育成を図ることにより実現可能となったものと考える。

繰り返しになるが、このように、2つのアンケートを実施することで、意図的・計画的に資質・能力を育成しようという取組を教科を含む教育活動全体で行うことにより、育成したい資質・能力が着実に生徒に育成されていることが明らかと言える。その際、生徒自身による自己評価を用いることで、生徒自らが資質・能力が育成されているという認識を持てたことをアンケートから見取ることは、生徒にとっても自己教育力の育成につながるものであり、資質・能力の育成を図る手立てとして、こうした取組が一定の成果を得られるものと判断できる。

一方で、こうしたアンケートを実施し分析を行う中で、

○教師が「生徒の実態」を把握し、指導内容の修正や精選に生かすことが重要である。

○教科によって、育成しやすい資質・能力がある

○資質・能力は関連して育成される

○教科をこえて資質・能力を育成している、

といったことを教職員全体で学び取ることができたことも大事な成果の一つと言える。そして、ここで得られた成果は、「論点整理」p.15で述べられている資質・能力と各教科との関連についての記載と重なるものであることが明らかとなった。（一部抜粋）

「このような資質･能力と各教科の関係を踏まえれば、学習指導要領の全体構造を検討するに当たっては、教育課程全体でどのような資質・能力を育成していくのかという観点から、各教科等の在り方や、各教科等において育成する資質・能力を明確化し、この力はこの教科等においてこそ身に付くのだといった、各

教科等を学ぶ本質的な意義を捉え直していくことが重要である。(以下略)」

②学習評価の取組について

すでに（4）①「学びのプラン」において触れているように、「生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができる」ものとなり「教師が指導の改善を図る」ものとなるような取組として「学びのプラン」を作成し活用をはかった。活用する中で、繰り返し、振り返りを実施した。(表3)

表3　20200714研究会での振り返り「学びのプラン」を活用したことでの発見（2020　笠原）

【良い点】	【課題点】
①　何を学ぶのか、何を目指すのかということを視覚的に伝え、生徒と教員で共有できる	○文での表現が難しい（話せるけど）生徒の見取りをどのような形で評価に入れていくか
②　まだ実施できていません	
③　何を学んだのか、どんなことをできるようにすれば良いのかを事前に知ることは見通しを持てて良いと思う。 ○思考等を論理的に書く、言語化することの難しさを生徒も教師も知ることができる（頭でわかっていても文章にできない生徒を正しく見取ることができるかは疑問点。	
④　見通しを持たせることができる（ＴもＳも）	□理科としてどこまで示せるか。(ほぼネタバレで察する子供にとっては確認実験になってしまう可能性もある)
⑤　どこが分かってどこが分からないのかを毎回知り、分からなかったところをまた次の授業で振り返ることができる。	○授業を修正したい時、プランの内容を配ってしまっているとまた、生徒に説明しないといけないので生徒も混乱してしまう。
⑥　振り返りや授業の目的が明確になっている	○プランの修正が必要になってくる。プラン通りに生徒と授業が進まないと全体がズレる
⑦　毎時間の学習のねらいや学習活動を見ながら見通しをもって授業に取り組んでいると思う	□題材の最後に全体の振り返りをさせているが、自己評価のＡＢＣに教師が付けた評価を記入して渡すか悩み中
⑧　今後検討していく必要があると思いました。子供の言葉にしなければ「評価」が伝わらない。教師の「学びのプラン」を見た時、見通せない生徒の姿が想像できてしまましました。子供用と教師用の違いを意識しながら作成していく統一していく必要があると思う。	
⑨　生徒が学習に対して明確なイメージを持つことができる	□学びについて評価の緻密化を求めるあまりまず大切になる学習者の力がきちんと表出する問い、課題づくりがおざなりになってします可能性がある(型にはめておわり)
⑩　見通しを持って取り組める。Ｃの生徒にとってよい指針になる	□評価基準を出し過ぎると似たような課題の成果物になっている
⑪　見通しが持てる	□詳細を示しきれない（基準）逆に示しすぎると面白みがない

さらに、生徒にも「学びのプラン」を授業で活用することについてアンケートを実施した結果、以下の通りであった。(◎　肯定的な意見　△　課題　★改善をしてほしい　)

◎私の意見に先生が賛同してくれたり、意見をくれたりすると試行錯誤ができるので、よりよい作品をつくることができる。本時のめあては、自分で書いた方が、何を理解するのかをよく理解できる。

◎改善すべきところがしっかりわかる。

◎自分がどのようなことを学んだかを後から見直すことができるから、次に繋げることができる。

△どのようなことを書けば良いかわからないので、いつも書く内容が決まってしまう。

△単元の具体的な活動が知りたい。

△もっと枠を大きくしてほしい。

★最後に単元の振り返りを書きたい。
★「～できる」というB基準を、それぞれの資質・能力のところに記してほしい。

各教科の特性を生かしながら工夫・改善に取組み、生徒の意見も取り入れながら継続してブラッシュアップが行われた。「つける評価」から「育てる評価」へと、生徒と評価を共有することで、指導の改善が進むと共に、生徒自身も自らの学習の状況を振り返りながら取り組むことにより、この学習を通してどのような資質・能力が身に付いているのかを実感することにもつながっている。また、こうした取組により、資質・能力の育成を図るには、指導と評価を一体的に進めることの重要性を改めて確認できたと言える。

(2)「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善について

各教科の学習指導要領解説には、「主体的・対話的で深い学び」についての記載がある。その記載に示されている内容を基に、生徒に資質・能力を育成するために、各教科においてそれぞれ取組を工夫して学習の充実を図っていった。

具体例として、技術・家庭科の家庭分野（2020年海野功子主幹教諭の実践）では、次の3つの視点から充実を図る取組を実践した。

・問題を見出して課題を設定し、見通しを持ち、計画を立て解決に取り組み、実践を評価・改善する学習
・他者と対話をしたり、協働する中で考えを明確にしたり、深めたりする学習
・生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら、その課題の解決に向けて自分の考えを構想したり、表現したりする学習

こうした視点に基づいた授業の工夫・改善を行った結果、生徒からは次のような振り返りが見られた。

◇計画性が持てた。提出日から逆算して、家でできることはするなどして、時間内に仕上げることができた。普段の生活でも逆算して考え、余裕をもって完成目標日を迎えられるようにしたい。
◇他の人と制作に入る前に作品のアドバイスをもらえたり、本当にできる？　というような意見や考えをもらえたりしたため、今、自分はかなり満足のできるような作品を作れて本当にうれしいし、感謝の気持ちでいっぱいになった。ぜひ、他の人といろいろな場面で意見や考えを共有したいと思う。

生徒にとっていかに充実した授業であったかが伝わってくるものであった。教師側が明確なねらいをもって指導計画を綿密に立て、単線的な流れではなく、繰り返し生徒が見直しや工夫ができる時間を確保する複線的な計画によって、育成したい資質・能力を身に付けさせることができる好事例であった。

また、家庭科以外でも生徒アンケートを実施した結果、生徒からは次のような回答があった。

質問：生徒の間で、話し合う活動では、話し合いのねらいを意識して、話し合うことができていると思うか。「思う」と回答した生徒の意見。

◆ペアワークやグループワークを中心とした 生徒主体の授業が多く、人と話すときの流れがだいたいわかるようになり、話し合いのねらいを意識する余裕ができたから。
◆何をおこなうときにも目標、目的が記されていたから。最初は気にしていなかったが、3 年間を通してそれらを意識した方がより深い学びにつながると気付いたと思う。

質問：授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う。「思う」と回答した生徒の意見

◆日々の授業だと思います。鎌中の3年間は話し合い活動や人の前で自分の考えを発表するとか、授業で多かった。つまり毎日やり続けている。LIFE（総合的な学習の時間）は資料づくりをする機会が

たくさんあったので、何回もやるうちにみんな慣れてきて自信が付いたのだと思う。

(3) 資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの取組について

学習指導要領総則には、学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のために、教科等の目標や内容を見通して、教科等横断的な学習を充実することが示されている。そうした観点に立って実践した事例として国語科の取組を紹介する。(「2020年度の研究の成果と課題」より引用、抜粋）すでに示したように、各教科には育成しやすい資質・能力があることや、他の教科でその育成した資質・能力を発揮する場面を目にしたことで、他教科と関連づけた単元の構想に取り組んだ例である。

【実践例】

具体的には、国語科では前年度までは「国語の力を意識的に活用させる」ために、単元の振り返りにおいて「他教科などで活用できる場面は何か」と生徒に考えさせていた。しかし、それだけでは机上のもので活用までには至らなかった。そこで、他教科と関連付けたものとなるような単元構想に取り組んだ。具体的には、1学年の指導事項「B書くこと（1）ア　目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を集め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること」の単元においては、理科のレポート作成を行った。理科の地学の分野から先取り学習として、自分でテーマを決定し、テーマについて調べ、国語科で学習したレポートの形式に合わせて情報を選択しながら、整理する活動である。

このように国語科だけで終わるレポートではなく、理科の授業でも使用するレポートを作成することにより、「理科の先生がレポートを見て、何が言いたいのかわかるように」という相手意識や、理科の知識や、理科の知識を付けるという目的意識も持って取り組むことができた。生徒からも「国語と理科のコラボで自分たちが普段やっている学習が生きるのがわかった」「これから理科レポートや数学での振り返りなどの文章を書くときに意識したい」という振り返りを得られた。また、理科のレポートを作成する単元で学習したことを、どのようなところで活用できたか2学期の終わりに尋ねた。そこでは「社会科のレポートで内容によって適切な資料を入れたり、項目を立てて説明したりできた」「理科の仮説の立て方で生かせた」「数学の単元の振り返りで図を使って説明するときに有効に活用する方法が分かった」という声があった。

このように実際に授業として実践することで、一つの教科だけでなく様々な機会をとらえて生徒は身に付けた知識や技能を生かし、教師が育成したいと考えている資質・能力の育成につながっていることを実感として得ることができたと言える。

5. まとめ

研究仮説として設定した「資質・能力が育成された生徒の姿を設定し、その実現に向けて教育活動をデザインするため、教育課程の評価･改善について計画的･組織的に取り組めば（カリキュラム･マネジメント）本校で育成したい4つの『資質・能力』を育成することができたかどうか学習評価等によって検証することができるであろう」について、

(1)「資質・能力」の育成を図ることができたかを検証する方法について

①アンケートの取組について

②学習評価の取組について

(2)「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善について

(3) 資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの取組について

上記3つの観点から考察を行った結果、生徒のアンケート結果等から得られた結果としては概ね達成がされていたと捉えている。3年というスパンの中での生徒の成長を見取るという継続した研究において、教師集団の入れ替えにより、研究の目的や方法等の再度の確認が必要になる場面や、冒頭でも触れたように、コロナウイルス感染症の感染拡大による休業中の学習の保障といった新たな課題への対応も含め、平坦な取組とは言えなかった。

とは言え、「学習指導要領」で示された資質・能力の育成に関し、学校として育成したい資質・能力をいち早く設定し、授業を通して育成するという一貫した取組は、カリキュラム・マネジメントの有効性を示したものと言える。また、指導と評価を一体的に捉え、十分に検討された指導計画・評価計画があって、初めて適切な評価がなされるという基本的な事項の重要性を再確認することにもなった。併せて、学習評価に関しては「つける評価から育てる評価」へと評価観が変わる中、「学びのプラン」を活用した形成的評価の充実により、生徒自身が評価に向き合い、学習の主体者として学びを振り返り、生徒自身が身に付けた力を実感し、教師の指導改善にも生かされた結果となった。

こうした取組が少なくとも当初の計画通りに実施できたのも、研究主任（海野功子主幹教諭）の適切かつ強力なリーダーシップによるものであり、毎回の研究会でのテーマ設定や取り組む内容が事前に周知されることにより、限られた時間の中で必要となる話し合いに関して集中して取り組むことができたからと捉えている。改めて、研究を牽引した研究主任の海野功子主幹教諭、資料を快く提供していただいた野村友昭教諭をはじめとする、研究に関わった附属鎌倉中学校の全教職員の皆様へ心からの謝意を示したい。

大学の附属中学校であることから、研究を先取りし、研究成果を多くの学校へ還元する役割を担っていることは、研究に取り組む上での大きなプレッシャーでもあるが、一方で新たな課題へのチャレンジという面もあり、そうしたことを楽しみながら取り組む姿に、私自身が勇気づけられたことが年間30回以上の研究会に足を運ぶ原動力ともなっていた。

一定の成果はあったと記したが、当然課題も多く残っており、特に、育成したい資質・能力の見取りや学習評価に関連して特に、「主体的に学習に取り組む態度」の評価のおける「粘り強く」「自己調整」といった点については継続して研究が続いている。2021年からは、隣接する小学校との小中連携した研究がスタートし「自立に向けてたくましく生きるー夢ふくらませ、心あたたかく、力あわせるー」をテーマに9年間を通して児童・生徒に資質・能力を育成することとなった。引き続きアドバイザーとして関わることになり、これまでは中学校3年間で育成することを考えていたが、今後は小学校の6年間が加わることで、中学校での取組がどのように生かされていくのか更なる研究を継続したい。

【引用・参考文献】

文部科学省、2014年、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」中央教育審議会（諮問）

文部科学省、2015年、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会　教育課程企画特別部会「教育課程企画特別部会　論点整理」

文部科学省、2016年、「幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）

石井英真、2017年、「資質・能力ベースのカリキュラム改革をめぐる理論的諸問題」『国立教育政策研究所紀要』第146集

後藤顕一、2017年、「学びの過程と問題解決力の育成における効果的な取組の事例」『国立教育政策研究所紀要』第146集

関口貴裕、2018年、「日本の学校教育における各教科等の学びで育成可能なコンピテンシーの関係性」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系』69巻1号、pp. 179−189

佐古秀一・宮根修、2011年、「学校における内発的改善力を高めるための組織開発（学校組織開発）の展開

と類型」『鳴門教育大学研究紀要』第26巻
松井典夫、2021年、「カリキュラム・マネジメントの今日的課題と成立要件の考察」『人間教育＝Online Journal of Humanistic Education』4巻
西野真由美、松原憲治、福本徹、2022年、「学校における教育課程編成の実証的研究」『国立教育政策研究所紀要』第151集、85–101ページ
田村和子・本間学・根津朋美・村川雅弘、2017年、「カリキュラム・マネジメントの評価手法の比較検討」『カリキュラム研究』第26号
辻本雅史、『「学び」の復権―模倣と習熟』岩波書店、2012年
国立教育政策研究所編、国研ライブラリー『資質・能力〔理論編〕』東洋館出版社、2016年
キエラン・イーガン、『深い学びをつくる』北大路書房、2016年
三宅なほみ、2011年、「概念変化のための協調過程―教室で学習者同士が話し合うことの意味」『心理学評論』54巻3号、328–341ページ
三宅なほみ・三宅芳雄、2010年、「学びのプロセスの多様性を解明する」『認知科学』17巻2号、372–376ページ
石井英真、2016年、「資質・能力ベースのカリキュラムの危険性と可能性」『カリキュラム研究』第25号
石井英真、2017年、「学習評価のあり方について」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会　児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ　第一回会議　配付資料）